

南朝梁の文壇における「斜」の美しさの発見

松 浦 崇

- 一 はじめに
- 二 齊代以前の詩歌における「斜」の用例
- 三 梁詩に描かれた「斜」の日
- 四 梁詩に描かれた「斜」の月
- 五 梁詩に描かれた「斜」の動植物
- 六 梁詩に描かれた「斜」の風景
- 七 梁詩に描かれた「斜」の女性美
- 八 まとめ

一 はじめに

私は十数年の歳月を費やして漢代から隋代までのすべての詩歌の一字索引を作り、最近^{註①}は11種類の索引を基礎にして、この時代の詩歌に用いられた語彙をすべて調査している。『漢魏晉南北朝詩「詩語」集成』と命名した表は、行数が16万を越す膨大な表であり、この表を作成する過程で色々な新しい発見があった。

たとえば、次頁の表をご覧ください。この表は「斜」という文字を用いた語彙の一覧表である。漢代から齊代まで、「斜」という文字の用例数はわずか16に過ぎないのに、梁代には実に用例数124と、飛躍的に増加していることを、この表は示している。^{註③}

	漢	三国	晋	宋	齐	梁	陳	北魏	北齐	北周	隋	總数
斜	5	・	3	2	6	124	19	1	5	15	22	202
斜入	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	1
斜上	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜日	・	・	・	1	1	7	1	・	・	・	1	11
斜月	・	・	2	・	・	5	・	・	・	・	2	9
斜文	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜出	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	1
斜去	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	1
斜生	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜光	・	・	・	・	・	2	1	・	・	・	・	3
斜合	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜色	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜谷	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜身	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜岸	・	・	・	・	・	3	・	・	・	・	・	3
斜來	・	・	・	・	・	2	・	・	・	・	・	2
斜柯	1	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	2
斜飛	・	・	・	・	・	1	・	1	・	・	・	2
斜柳	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜盼	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜看	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜紅	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜峯	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1	2
斜峰	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜徑	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1
斜扇	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜桂	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜浪	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜梁	・	・	・	・	・	2	・	・	・	・	・	2
斜接	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜望	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	1
斜插	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜景	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜窗	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜開	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜陽	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1
斜暉	・	・	・	・	・	2	2	・	・	1	1	6
斜照	・	・	・	・	・	・	1	・	・	1	・	2
斜溪	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	1
斜晴	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜豎	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1

斜筵	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜漢	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1	2
斜領	・	・	・	・	・	1	1	・	・	・	・	2
斜綸	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1
斜影	・	・	・	・	・	1	1	・	1	・	・	3
斜調	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1
斜輝	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜橋	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜燈	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜茶	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜蹄	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜趨	・	・	・	・	・	1	1	・	・	・	・	2
斜臨	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜還	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	1
斜闌	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜瞻	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜簪	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
斜轉	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
山斜	・	・	・	・	・	・	2	・	・	・	・	2
已斜	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
日斜	・	・	1	・	・	5	1	・	1	2	2	12
月斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	1	2
文斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
火斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
未斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
回斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
光斜	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1
西斜	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	1
低斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
飛斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
狹斜	2	・	・	・	・	8	3	1	・	2	4	20
城斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
偏斜	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
欲斜	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1
景斜	・	・	・	1	・	3	・	・	・	・	・	4
復斜	・	・	・	・	・	1	・	・	1	・	・	2
窗斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
雲斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
影斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
澗斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1
樹斜	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1

ところで、「斜」は「邪」に通じて、「正しくない」「かたよっている」「ねじ曲がっている」「よこしまだ」など、悪い意味で使われることが多い。そのことを端的に示す逸話がある。

魯黔婁先生之妻也。先生死。曾子與門人往弔之。其妻出戸。曾子上堂見先生尸、在牖下、枕桴席稿、緇袍不表。覆以布被、手足不盡歛。覆頭則足見、覆足則頭見。曾子曰、「斜引其被、則歛矣。」妻曰、「斜而有餘、不如正而不足也。先生以不斜之故、能至于此。生時不邪、死而邪之、非先生之意也。」曾子不能應。

魯の黔婁先生の妻なり。先生死す。曾子門人と往きて之れを弔す。其の妻戸より出づ。曾子堂に上りて先生の戸を見るに、^{いう}牖^か下に在りて、撃を枕とし稿を^{むしろ}席とし、^{うんぽう}縕袍表あらず。覆ふに布被を以てし、手足^{おさま}尽くは^{あは}歛らず。頭を覆へば則ち足見れ、足を覆へば則ち頭見はる。曾子曰く、「斜めに其の被を引けば、則ち^{おさま}歛らん」と。妻曰く、「斜めにして余り有るは、正にして足らざるに如かず。先生は不斜の故を以て、能く此に至る。生ける時邪ならざりしに、死して之を邪にするは、先生の意に非ざるなり」と。曾子^{こたふ}応ふる能はず。

（劉向『列女伝』賢明伝）

黔婁子の葬儀に参列した曾子は、貧乏なために満足な布団すらなく、手足がはみ出た黔婁子の遺体に見かねて、「斜めに毛布をかけたら収まるのではないか」と提案する。それを聞いた黔婁子の妻は、「斜めにして余りがあるのは、正しくして足らないのには及びません」と、即座に反論する。毛布を斜めにかかることと、斜めにゆがんだ生き方をすることは、本質的に違っているが、いずれにしる、「正しい」「真っすぐだ」というプラスのイメージに対して、「曲がった」「斜めだ」というのは、マイナスのイメージがある。

本稿では、こうした否定的なニュアンスのある語を積極的に詩歌の中で取り上げ、また新しい文学的素材を次々に発掘した齊梁時代の詩人に着目し、詩人たちの美意識の変化等について論じてみたい。

二 齊代以前の詩歌における「斜」の用例

それではまず、梁代以前の、漢代・晋代・宋代・齊代の詩歌における「斜」の用例について見てみよう。

（一）漢 代

漢代の詩歌には、次のような4つの用例がある。

- 1 夫婿從門來 夫婿 門より来り
[○]斜[○]柯西北^み𪔐 斜柯して 西北に𪔐る

（漢・相和歌辞「艷歌行」）

- 2 女行無[○]偏[○]斜 女の行ひに 偏斜無く
 何意致不厚 何ぞ意はん 厚からざるを致すとは

（漢・雜曲歌辞「古詩為焦仲卿作」）

- 3 年歲晚暮時已斜 年歲 晚暮 時 已に斜めなり
安得力士翻日車 安くにか力士を得て 日車を翻さん

(漢・李尤「九曲歌」)

- 4 長安有狹斜 長安に狹斜有り
狹斜不容車 狹斜にして 車を容れず

(漢・相和歌辞「長安有狹斜行」)

1の「艷歌行」は、長旅を続ける兄弟のみすぼらしい衣服に同情した宿屋の女主人が、親切心で衣服を繕っていると、外出から帰って来た亭主が、「斜柯」、すなわち斜めに寄り掛かり、妻の行いに疑惑の目を向けたというものである。旅人の想像を絶する苦勞の一端を描いた詩である。

2の「古詩為焦仲卿妻作」は、すべての権力と義務が家父長たる長男に集中する封建的な家族制度の犠牲となって、最後は心中してしまう夫婦の悲劇を描いた有名な物語詩であり、「女の行ひに徧斜無し」は、姑母に向かって夫が妻を弁護する時に発せられた言葉である。

3の李尤の「九曲歌」は、無為のまま時間の過ぎ去るのを嘆き、何とかして斜めに傾く夕陽を留めたいと願うものである。

4の「長安有狹斜行」は、狭く斜めに曲がった長安の道を、大きな車に乗って、我が物顔に走る貴族の若者を描いたものである。この樂府詩は、経済的な豊かさへの憧れと、富貴に溺れる人間への戒めの両面から、後に多くの模擬作品が生まれ、「狹斜」という語彙の用例数も多い。

以上の4例中、「斜」を良い意味で使ったものは皆無である。

(二) 晋 代

次に、晋代の3つの用例を見る。

- 1 川上有餘吟 川上に 余吟有り
日斜思鼓缶 日斜めにして 缶を鼓さんことを思ふ

(晋・苕華「贈竺度」)

- 2 涼風開窗寢 涼風 窓を開きて寝ね
斜月垂光照 斜月 光を垂らして照る
中宵無人語 中宵 人の語る無く
羅幌有雙笑 羅幌に双笑有り

(晋・清商曲辞「子夜四時歌」秋歌)

- 3 紫霞烟翠蓋 紫霞 翠蓋を烟らせ

斜^〇月^〇照綺窗 斜月 綺窓を照らす
銜悲握離袂 悲しみを銜^{ふく}みて 離袂を握る
易爾還年容 爾を易^{かえ}へて 年容を還せ

（晋・清商曲辞「七日夜女郎歌」九首 其九）

1 は、孔子や莊子の故事を用いて、流れ続ける川や斜めに傾く夕日を眺めつつ、人生の無常を詠じた歌である。

2 と 3 の恋愛詩における「斜月」の用例は特に注目すべきであり、斜めに傾いて窓から女性の寝室に入りこむ秋の明月は、あまりにも美しく、また失意の女性の悲しみを増幅させる残酷な存在であった。

（三）宋 代

次に、宋代の 2 例を挙げる。

- 1 合樽據景斜 樽を合すれば 遽^{には}かに景斜めに
折榮吝組芬 榮を折りて 組芬^をを吝しむ

（宋・鮑照「三日遊南苑」）

- 2 歔歔闇中啼 歔歔として 闇中に啼けば
斜^〇日^〇照帳裏 斜日 帳裏を照らす
無油何所苦 油無くして 何の苦しむ所ぞ
但使天明爾 但だ天をして明けしむるのみ

（宋・清商曲辞「讀曲歌」）

2 は、一晩中泣き明かし、「斜日（斜めに昇る朝日）」に照らされながら苦悶する女性を詠じた歌である。東晋時代に長江下流で流行した「呉歌」や、宋代以降、長江の中流で歌われた「西曲」などの南朝の民間歌謡は、齊梁の宮廷詩人に愛好され、当時の文壇で大流行する。

（四）齊 代

齊の時代には、次の 6 例がある。

- 1 青關望斷 青関 望み断え
白日西斜^〇 白日 西に斜めなり

（齊・高帝蕭道成「塞客吟」）

- 2 斜[○]峯[○]繞徑曲 斜峯 徑曲を繞り
聳石帶山連 聳石 山を帯びて連なる

(齊・王融「廻文」)

- 3 遠天去浮雲 遠天 浮雲去り
長墟[○]斜落景 長墟 落景 斜めなり

(齊・顧慆「望廨前水竹詩」)

- 4 對窗斜[○]日[○]過 窓に対して 斜日^{よぎ}過り
洞幌鮮[○]颺入 幌^{とう}を洞して 鮮^{あき}颺入る

(齊・謝朓「夏始和劉潺陵」)

- 5 玉繩隱高樹 玉繩は 高樹に隠れ
斜[○]漢[○]耿層臺 斜漢は 層台に耿^{あき}らかなり

(齊・謝朓「離夜」)

- 6 發翠斜[○]溪[○]裏 翠を發す 斜溪の裏
蓄寶宕山峯 宝を蓄ふ 宕山の峯

(齊・謝朓「詠燈」)

このうち、4・5・6は、六朝時代の大詩人、謝朓(466~499)の作品である。4は山水詩、5は送別詩、6は詠物詩に分類できるだろう。斜めに射し込む夕日(4)、斜めに横たわる天の川(5)、斜めに流れる谷川(6)と、内容も多彩で、しかも表現がいずれも美しい。

以上、梁代以前の詩歌に用いられた「斜」の例を見てきたが、漢代から齊代まで合わせても、わずか16例しかなく、それほど重要な詩語ではなかった。

ところが、梁の時代になると、簡文帝蕭綱(503~551)一人だけで32もの用例があり、総数122と、「斜」は爆発的に増加する。ということは、簡文帝蕭綱を中心とした南朝梁の文壇において、新たな美意識の萌芽を認めることが出来るのではないだろうか。

ちなみに、「斜」の用例数が複数ある梁の詩人には、元帝蕭繹(12例)、何遜(11例)、王僧孺(7例)、劉孝威(6例)、吳均(5例)、沈約(4例)、蕭子範(3例)江洪(3例)、江淹(2例)・庾肩吾(2例)・王筠(2例)・費昶(2例)らである。

三 梁詩に描かれた「斜」の日

「斜」のものとして最も用例数が多いのは、日（太陽）と月である。日は、夕日が圧倒的に多いが、朝日の用例も幾つかある。

（一）朝 日

- 38 映日[○]斜生海 映日 斜めに海に生じ
跨樹似鵬飛 樹を跨ぐこと 鵬の飛ぶに似たり

（梁・張率「玄雲」）

- 87 朝日[○]斜來照戸 朝日 斜めに來りて 戸を照らし
春鳥爭飛出林 春鳥 争ひ飛びて 林を出づ

（梁・簡文帝蕭綱「倡樓怨節詩」）

- 122 花庭麗影[○]斜 花庭 麗影 斜めなり
蘭牖輕風度 蘭牖 輕風^{わた}度る
落日更新妝 落日 更に新妝
開簾對春樹 簾を開きて 春樹に對す

（梁・劉令嫺「答外詩」二首 其一）

「花の咲き誇る庭に 麗しい日影が斜めに照らす」という122の詩は、『文選』の編者と目される劉孝綽の妹の作品である。東の空から日が斜めに昇る朝から、西の空に日が落ちる夕暮れまで、恋しい人を思い続けている女性の心は悲しい。『玉台新詠』にも収録されている美しい恋愛詩である。

（二）夕 日

「朝日」という詩語の用例は梁代に10例あるものの、飛躍的に増加したのは「夕日」である。ちなみに、「落日」の用例数も24と激増している。

	漢	三国	晋	宋	齊	梁	陳	北魏	北齊	北周	隋	総数
落日	・	1	1	5	3	21	5	・	1	1	2	40
落暉	・	・	1	1	・	4	6	・	・	1	1	14

次に、斜めに沈む夕日の用例を挙げる。

- 1 蕭條晩秋景 蕭条たり 晩秋の景
旻雲承[○]景[○]斜 旻雲 景斜を承く

(梁・江淹「秋夕納涼奉和刑獄舅詩」)

- 3 傾光望轉蕙 傾光 転蕙を望み
斜[○]日照西垣 斜日 西垣を照らす

(梁・任昉「苦熱行」)

- 11 日斜[○]迢遞宇 日は斜めなり 迢遞たる宇
風起嵯峨雲 風は起こる 嵯峨たる雲

(梁・何遜「九日侍宴樂游苑詩為西封侯作」)

- 12 遠天去浮雲 遠天 浮雲去り
長墟[○]斜落景 長墟 落景斜めなり

(梁・何遜「望廡前水竹答崔録事詩」)

- 19 欄外鶯啼罷 欄外 鶯 啼くこと罷め
園裏日光斜[○] 園裏 日光 斜めなり

(梁・何遜「贈王左丞詩」)

- 20 暮煙起遙岸 暮煙 遙岸より起こり
斜[○]日照安流 斜日 安流を照らす

(梁・何遜「見征人分別詩」)

- 24 聊持駐[○]景[○]斜 聊か^{もつ}持て景斜を駐めんとするも
25 景斜不可駐 景斜は 駐む可からず

(梁・呉均「采藥大布山詩」)

- 30 回風稍驚水 回風 稍^やや水を驚かし
落光漸[○]斜[○]岸 落光^{やうや} 漸く岸に斜めなり

(梁・王僧孺「侍宴詩」)

- 34 斜[○]光隱西壁 斜光 西壁に隠れ

暮雀上南枝 暮雀 南枝に上る

（梁・王僧孺「秋閨怨詩」）

36 岸煙起暮色 岸煙 暮色起こり
岸水帶斜暉 岸水 斜暉を帯ぶ

（梁・王僧孺「詠春詩」）

44 雨罷葉増緑 雨罷みて 葉 緑を増し
日斜樹影長 日斜めにして 樹影長し

（梁・蕭子顯「侍宴餞陸倕令」）

66 北窗聊就枕 北窓にて 聊か枕に就くも
南簷日未斜 南簷 日 未だ斜めならず

（梁・簡文帝蕭綱「詠内人昼眠詩」）

72 香煙出窗裏 香煙 窓裏より出で
落日斜階上 落日 階上に斜めなり

（梁・簡文帝蕭綱「戲作謝惠連体十三韻詩」）

74 斜日晚駸駸 斜日 晩 駸駸として
池塘生半陰 池塘 半陰生ず

（梁・簡文帝蕭綱「納涼詩」）

75 浮雲出東嶺 浮雲 東嶺より出で
落日下西江 落日 西江に下る
促陰橫隱壁 陰を促して 横さまに壁に隠れ
長暉斜度窗 長暉 斜めに窓をわたる

（梁・簡文帝蕭綱「秋晚詩」）

78 杏梁斜日照 杏梁 斜日照り
餘輝映美人 余輝 美人に映ず

（梁・簡文帝蕭綱「擬落日窓中坐詩」）

83 風還影合離 風還りて 影 合離し
日斜光隱見 日斜めにして 光 隠れて見ゆ

（梁・簡文帝蕭綱「詠梔子花詩」）

- 88 落日斜飛蓋 落日 飛蓋に斜めに
餘暉承畫輪 余暉 画輪を承く

(梁・簡文帝蕭綱「傷離新体詩」)

- 90 去影背斜日 去影 斜日に背き
香衣臨上風 香衣 上風に臨む

(梁・庾肩吾「送別於建興苑相逢詩」)

- 94 雕甍斜落景 雕甍 落景斜めに
畫扇拂遊塵 画扇 遊塵を払ふ

(梁・鮑泉「落日看還詩」)

- 97 東方曉星沒 東方 曉星沒し
西山晚日斜 西山 晚日斜めなり

(梁・元帝蕭繹「歌曲名詩」)

- 99 高春斜日下 高春 斜日の下
佳氣滿欄楹 佳氣 欄楹に満つ

(梁・元帝蕭繹「納涼詩」)

- 104 日斜下北閣 日斜めにして 北閣を下り
高宴出南榮 高宴 南榮に出づ

(梁・元帝蕭繹「和林下作妓応令詩」)

- 105 暮春多淑氣 暮春 淑氣多く
斜景落高春 斜景 高春に落つ

(梁・元帝蕭繹「遊後園詩」)

- 112 日斜天欲暮 日斜めにして 天 暮れんと欲し
風生浪未息 風生じて 浪 未だ息まず

(梁・費昶「採菱詩」)

- 120 柳谷向夕沈餘日 柳谷 夕に向かひて 余日沈み
蕙樓臨砌徒斜光 蕙樓 砌に臨みて 斜光を徒す

(梁・沈君攸「薄暮動弦歌」)

斜めに傾く夕日は、恋愛の破局を暗示するようで、いずれも哀愁がつきまとっている。このうち、34・72・78・90・90・122は、『玉台新詠』に収められている典型的な「宮体詩」である。恋しい人を思って悩む美女の心理を表すのに、斜めに沈もうとする黄昏時の夕日は、極めて効果的である。

四 梁詩に描かれた「斜」の月

次に、斜めに傾く月の用例を挙げる。

- 9 影逐斜月來 影は 斜月を逐ひて来り
 香隨遠風入 香は 遠風に随ひて入る
 言是定知非 是と言はんとすれば 定めて非なるを知り
 欲笑翻成泣 笑はんと欲すれば 翻^{かえ}って泣を成す

（梁・沈約「為鄰人有懷不至詩」）

- 16 曉河沒高棟 曉河 高棟に没し
 斜月半空庭 斜月 空庭に半なり

（梁・何遜「和蕭諮議岑離閨怨詩」）

- 18 浦口望斜月 浦口にて 斜月を望み
 洲外聞長風 洲外にて 長風を聞く

（梁・何遜「夜夢故人詩」）

- 21 閨閣行人斷 閨閣 行人 断え
 房櫳月影斜 房櫳 月影 斜めなり
 誰能北窗下 誰か能く北窓の下
 獨對後園花 獨^{ひと}り後園の花に対せん

（梁・何遜「閨怨詩」二首 其二）

- 32 浪逐東歸水 浪は 東帰の水を逐ひ
 心挂西斜月 心は 西斜の月を挂く

（梁・王僧孺「忽不任愁聊示固遠詩」）

- 54 簾月度斜輝 簾月 斜輝^{わた}り
 風光起餘馥 風光 余馥起こる

（梁・蕭子範「夏夜独坐詩」）

- 55 光景斜漢宮 光景 漢宮に斜めなり
横梁照采虹 横梁 采虹を照らす

(梁・蕭子範「春望古意詩」)

- 56 入帳華珠被 帳に入りて 珠被華やかに
斜筵照寶瑟 筵に斜めにして 宝瑟を照らす

(梁・蕭子範「望秋月詩」)

- 96 松澗流星影 松澗 流星の影
桂窗斜月暉 桂窓 斜月^{ひか}暉る

(梁・元帝蕭繹「船名詩」)

- 98 裂紈依岸草 紈を裂きて 岸の草に依り
斜桂逐行船 斜桂 行船を逐ふ

(梁・元帝蕭繹「望江中月影詩」)

- 116 月斜樹倒影 月斜めにして 樹影^{さかさま}を倒にし
風至水迴文 風至りて 水 文を廻らす

(梁・庾丹「秋閨有望詩」)

- 117 樹陰縁砌上 樹陰 砌に縁りて上り
窗影向牀斜 窓影 牀に向かひて斜めなり

(梁・鄧鏗「月夜閨中詩」)

「斜日」が夕暮れ時なのに対して、「斜月」は夜明け方を表すことが多い。失恋して夜通し思い悩む女性の心理を表すのに、斜めに傾く夜明け方の月は、極めて効果的である。

「斜月」といえば、初唐の詩人、張若虚(660?~720?)の「春江花月夜」の次の句を思い浮かべる。

江水流春去欲盡 江水 春を流して 去りて尽きんと欲す
江潭落月復西斜 江潭の落月 復た西に斜めなり
斜月沈沈藏海霧 斜月 沈沈として 海霧に藏れ
碣石瀟湘無限路 碣石 瀟湘 無限の路

(初唐・張若虚「春江花月夜」)

梁代の詩歌が、いずれも個人的なレベルの恋愛感情を描いているのに対して、唐代の詩歌は、雄大な空間、無限の時間を描いてスケールが大きい。

西宮夜静百花香	西宮 夜静かにして 百花香しく
欲捲珠簾春恨長	珠簾を捲かんと欲して 春恨長し
斜抱雲和深見月	斜めに雲和を抱きて 深く月を見る
朧朧樹色隱昭陽	朧朧たる樹色 昭陽を隠す

（盛唐・王昌齡「西宮春怨」）

この王昌齡（698～755？）の名作も、斜めに傾く月のイメージを高度に発展させた歌である。

五 梁詩に描かれた「斜」の動植物

では次に、梁詩に描かれた「斜」に飛んだり走ったりする動物（鳥・獣・虫）と、「斜」に伸びたり影を落としたりする植物について述べる。

（一）動 物

37 遠度時依幕	遠く ^{わた} 度りて 時に幕に依り
斜來如畏窗	斜めに來りて 窓を畏るるが如し

（梁・紀少瑜「月中飛螢詩」）

45 長絲觸欄斷	長糸 欄に触れて断え
歸鳥避窗斜	歸鳥 窓を避けて斜めなり

（梁・劉綏「和晚日登樓詩」）

48 翩翩驄馬驅	翩翩として 驄馬驅り
橫行復斜趨	橫行して 復た斜めに趨く

（梁・劉孝威「驄馬驅」）

65 避鷹時聳角	鷹を避けて 時に角 ^{そばだた} を聳せ
妬壠或斜飛	妬を妬みて 或は斜めに飛ぶ

（梁・簡文帝蕭綱「雉朝飛操」）

76 影斜鞭照曜	影は斜めにして 鞭 照曜し
----------	---------------

塵起足蹉跎 塵起こりて 足 蹉跎たり

(梁・簡文帝蕭綱「西齋行馬詩」)

101 路遠聲難徹 路遠くして 声 徹し難く
飛斜行未齊 飛ぶこと斜めにして 行 未だ齊しからず

(梁・元帝蕭繹「詠晚棲鳥詩」)

115 弓寒折錦韉 弓寒くして 錦韉を折り
馬凍滑斜蹄 馬凍えて 斜蹄 滑らかなり

(梁・戴嵩「從軍行」)

124 鴻來雀化 鴻来りて 雀化し
參見火斜 参じて 火を見て斜めなり

(晋・郊廟歌辞「歌白帝辞」)

45・65・101・124は斜めに飛ぶ鳥の用例、48・76・115は斜めに走る馬の用例である。たとえば、「路が遠くて鳴き声は届かず、斜めに飛ぶので列が揃わない」(101)という歌は、ねぐらに帰るカラスを描いて、浮気して帰ってこない夫を待ち続ける妻の嘆きを述べたものである。鳥にしろ、馬にしろ、本来は真っすぐ飛び、真っすぐ走るべき動物が、斜めに飛び、斜めに走るのは、人生行路の困難さを暗示している。

37は、斜めに飛ぶ蛩を描いたものである。蛩が中国古典詩に登場するのは遅く、晋代以前は皆無で、宋代に1例・斉代に2例しかないが、梁の時代には24もの詩歌に描かれており、そのおぼろげな姿が、夜通し恋に悩む女性と結びついて、文学の素材として注目され始める〔註④を参照〕。

(二) 植 物

「斜」に伸びたり、「斜」に影を落としたり、「斜」に揺れたりしている植物の用例を次に挙げる。

17 直荷□□水 直き荷は □水を□し
斜柳細牽風 斜めの柳は 細やかに風に牽かる

(梁・何遜「傷徐主簿」)

33 翠枝結斜影 翠枝 斜影を結び
綠水散圓文 綠水 円文を散ず

(梁・王僧孺「春日寄鄉友詩」)

- 43 荷陰斜合翠 荷陰 斜めに翠を合し
蓮影對分紅 蓮影 分紅に対す

（梁・徐勉「夏詩」）

- 47 丹庭斜草徑 丹庭に 草徑斜めに
素壁點苔錢 素壁に 苔錢点ず

（梁・劉孝威「怨詩」）

- 68 細松斜遶逕 細松 斜めに逕を遶り
峻嶺半藏天 峻嶺 半ば天に藏る

（梁・簡文帝蕭綱「往虎窟山寺詩」）

- 85 織條寄喬木 織條 喬木に寄り
弱影掣風斜 弱影 風に掣かれて斜めなり

（梁・簡文帝蕭綱「詠藤詩」）

- 100 横枝斜綰袖 横枝 斜めに袖を綰^すべ
嫩葉下牽裾 嫩葉 下 裾を牽く

（梁・元帝蕭繹「看摘薔薇詩」）

- 107 樹斜牽錦帔 樹 斜めにして 錦帔を牽き
風横入紅綸 風 横さまにして 紅綸に入る

（梁・徐君蒨「初春携内人行戲詩」）

- 108 荷陰斜合翠 荷陰 斜めに翠を合し
蓮影對分紅 蓮影 分紅に対す

（梁・徐朏「夏詩」）

- 118 綠葵向光轉 綠葵 光に向かひて轉じ
翠柳逐風斜 翠柳 風を逐ひて斜めなり

（梁・聞人倩「春日詩」）

- 119 衣香隨岸遠 衣の香りは 岸に随ひて遠ざかり
荷影向流斜 荷の影は 流れに向かひて斜めなり

（梁・沈君攸「採蓮曲」）

43・108・119は蓮、17・118は柳、68は松、85は藤、100は薔薇である。「緑色の枝が斜めに伸びた影を形作り、緑の水面に丸い波紋が広がった。」(33)「横に伸びた枝が斜めに袖をひっかけ、柔らかい葉が下のほうで裾をひっぱる。」(100)「樹の枝が斜めに出て 錦のうちかけをひっかけ、風は横から赤い頭巾に吹き入る。」(107) など、その情景描写は卓越している。

疎影横斜水清浅 疎影 横斜して 水 清浅
暗香浮动月黄昏 暗香 浮动して 月 黄昏

(北宋・林逋「山園小梅」二首 其一)

梅を描いた最高傑作の詩として名高い林逋(967～1028)の詩も、対句などの形式美を重んじる南朝文学の影響が考えられるだろう。

六 梁詩に描かれた「斜」の風景

次に、梁詩に描かれた「斜」の風景として、「雨・雪・雲」と「山水」および「橋」の三つに分けて述べる。

(一) 雨・雪・雲

5 落暉散長足 落暉 長足を散じ
細雨織斜文 細雨 斜文を織る

(梁・虞騫「擬雨詩」)

39 從雲合且散 雲に従ひて 合し且つ散じ
因風卷復斜 風に因りて 巻き復た斜めなり

(梁・裴子野「詠雪詩」)

60 雲斜花影沒 雲斜めにして 花影沒し
日落荷心香 日落ちて 荷心香る

(梁・簡文帝蕭綱「苦熱行」)

(二) 山 水

2 我有幽蘭念 我に幽蘭の念有り
銜意囑里斜 意を銜みて 里斜を囑る

(梁・江淹「当春四韻同□左丞詩」)

- 10 曲池浮采采 曲池に浮かびて 采采たり
 (110) 斜岸列依依 斜岸に列して 依依たり
 (梁・柳惲「詠薔薇詩」)
 (梁・江洪「詠薔薇詩」)
- 22 遠鼓依林響 遠鼓 林に依りて響き
 連檣倚岸斜 連檣 岸に倚りて斜めなり
 (梁・朱記室「送別不及贈何殷二記室詩」)
- 26 直趣珠星北 直に珠星の北に趣き
 斜開碧海東 斜めに碧海の東に開く
 (梁・呉均「憶費昶詩」)
- 40 潤斜日欲隱 潤 斜めにして 日 隠れんと欲し
 煙生樓半藏 煙 生じて 樓 半ば藏る
 (梁・昭明太子蕭統「開善寺法會詩」)
- 49 荒徑橫臨浦 荒徑 横さまに浦に臨み
 空舟斜插橈 空舟 斜めに橈を挿む
 (梁・劉孝威「奉和六月壬午応令詩」)
- 73 日正山無影 日 正にして 山に影無く
 城斜漢屢廻 城 斜めにして 漢 屢しば廻る
 (梁・簡文帝蕭綱「漢高廟賽神詩」)
- 77 一水斜開岸 一水 斜めに岸に開き
 雙城遙共雲 双城 遙かに雲を共にす
 (梁・簡文帝蕭綱「登城北望詩」)
- 89 岸燭斜臨水 岸燭 斜めに水に臨み
 波光上映樓 波光 上りて樓に映ず
 (梁・簡文帝蕭綱「曲水聯句詩」)

(三) 橋

- 53 岸曲^〇斜^〇梁阻 岸曲がりて 斜梁阻む
何時香歩歸 何れの時にか 香歩帰らん

(梁・徐擒「壊橋詩」)

- 80 遠燭承歌黛 遠燭 歌黛を承け
斜^〇橋聞履聲 斜橋 履声を聞く

(梁・簡文帝蕭綱「九日賦韻詩」)

- 81 斜^〇闌隱濁霧 斜闌 濁霧を隠し
布影入清澗 布影 清澗に入る

(梁・簡文帝蕭綱「賦得橋詩」)

- 86 斜^〇梁懸水跡 斜梁 水の跡に懸け
畫柱脱輕朱 画柱 輕朱を脱す

(梁・簡文帝蕭綱「詠壊橋詩」)

(一) に、「斜」という表現を用いて、雨や雪や雲を描いた例を挙げた。「落ちる夕陽が 長い足を地面に伸ばし、細かな雨が 斜めの文模様を織りなしている。」(5)「雪は 雲と一緒に合わさったかと思うとまた離れ、風に吹かれて巻き上がっては また斜めに降りしきる。」(39)「雲が斜めに動くと 花の影が姿を消し、太陽が沈むと 蓮の中心が香ってくる。」(60) いずれも、対句を用いて雨や雪や雲をシンメトリカルに描いている。

(二) には、斜めに続く村里の小道、斜めに連なる岸辺や垣根など、「山水詩」の例を幾つか挙げた。「山水詩」といえば、梁代より遡ること約100年前の、宋代の謝靈運(385～433)が有名である。謝靈運は、善意が悪意にとられる醜い政治世界に絶望して、何度か隠遁生活を送っている。謝靈運にとっての山水自然は、あくまでも美しく、あくまでも神秘的であった。

(三) は、斜めに横たわる橋を描いた用例である。あの謝靈運には「斜」の用例も「橋」の用例もない。このうち、53と86は、壊れた橋を詠じた「詠物詩」に分類できる。従来注目されることのなかった「橋」、しかも壊れて「斜」にかかっている橋に風情を感じて、「詠物詩」の素材に組み入れたことは、注目に値する〔註④参照〕。

斜めの風景として想起されるのは、杜牧(803～852)の次の詩である。

- 遠上寒山石徑斜 遠く寒山に上れば 石径斜めなり
白雲生處有人家 白雲生ずる処 人家有り

停車坐愛楓樹林　車を停めて坐ろに愛す 楓樹の林
霜葉紅於二月華　霜葉は二月の花よりも紅なり

（晩唐・杜牧「山行」）

南朝梁の詩人たちが発見した「斜」の美意識は、まさしく杜牧の卓越した風景描写の源流となっている。

七 梁詩に描かれた「斜」の女性美

最後に、女性の美しさや悲しさを詠じた詩歌について述べる。

（一） 寝 室

まず、女性の寝室の描写から用例を3つ挙げる。

51 開闌簾影出　関を開けば 簾影出で
參差風焰斜　参差として 風焰斜めなり

（梁・劉孝威「和簾裏燭詩」）

64 斜窗通葦氣　斜窓 葦氣を通じ
細隙引塵光　細隙さいげき 塵光を引く

（梁・簡文帝蕭綱「艷歌曲」）

71 斜燈入錦帳　斜灯 錦帳に入り
微煙出玉牀　微煙 玉牀より出づ

（梁・簡文帝蕭綱「倡婦怨情詩」十二韻）

失恋や遠距離恋愛に苦しむ女性の詩に沈む夕陽や斜めに傾く月が効果的であることは、すでに見てきたが、斜めに揺れる灯火の炎を詠じた51・71や、「斜めに開けた窓から 花の香りが入り、細い隙間から 外の光が射しこむ。」と詠じた64の詩も、女性の不幸を暗示する「斜」という一文字が効果的である。

（二） 姿 態

女性の姿態を「斜」という語で美しく表現した例を次に挙げる。

- 4 羅裙有長短 羅裙に長短有り
翠鬢無低斜 翠鬢に低斜無し

(梁・丘遲「答徐侍中為人贈婦詩」)

- 7 斜簪映秋水 斜簪は 秋水に映じ
開鏡比春妝 鏡を開きて 春妝を比す

(梁・沈約「携手曲」)

- 28 錦腰連枝理 錦腰 連枝の理
繡領合歡斜 繡領 合歡斜めなり

(梁・吳均「雜絕句詩」四首 其三)

- 35 轉盼非無以 轉盼^{ゆえ} 以無きに非ず
斜扇還相囑 斜扇^ま 還た相囑す

(梁・王僧孺「在王晋安酒席数韻詩」)

- 41 斜身含遠意 身を斜めにして 遠意を含み
頓足有餘情 足を頓めて 余情有り

(梁・殷芸「詠舞詩」)

- 50 紅衫向後結 紅衫 後ろに向かひて結び
金簪臨鬢斜 金簪 鬢に臨みて斜めなり

(梁・劉孝威「都京遇人見織率爾寄婦詩」)

- 58 分妝間淺靨 妝を分かちて 淺靨^{せんえふ}を間し
繞臉傳斜紅 繞^{けん}臉を繞りて 斜紅^つを傳く

(簡文帝蕭綱「豔歌篇十八韻」)

- 62 雜與鬢簪插 雜ふるに鬢簪を挿み
偶逐鬢鈿斜 偶^{たま}たま鬢鈿を逐ひて斜めなり

(梁・簡文帝蕭綱「茱萸女」)

- 63 牀頭辟繩結 牀頭 辟繩結び
鏡上領巾斜 鏡上 領巾斜めなり

(梁・簡文帝蕭綱「金樂歌」)

- 70 攬袴輕紅出 袴を攬^とれば 輕紅出で
回頭雙鬢斜 頭を回らせば 雙鬢斜めなり

（梁・簡文帝蕭綱「變童詩」）

- 79 北窗向朝鏡 北窓にて 朝の鏡に向かひ
錦帳復斜榮 錦帳 復た斜めに榮ず

（梁・簡文帝蕭綱「美人晨粧詩」）

- 84 散誕垂紅帔 散誕として 紅帔を垂らし
斜柯插玉簪 斜^〇柯^〇して 玉簪を挿す

（梁・簡文帝蕭綱「遙望詩」）

- 93 含嬌起斜盼 嬌を含みて 起ちて斜^みめに盼
歛笑動微嚬 笑ひを歛めて 微嚬を動かす

（梁・王筠「五日望採拾詩」）

- 95 比來粧點異 比來 粧点異なり
今世撥鬢斜 今世 撥鬢斜めなり

（梁・劭陵王蕭綸「見姬人詩」）

- 109 斜^〇睛若不眴 睛^{ひとみ}を斜^〇めにして 眴^{かへり}みざるが若く
當轉復遲疑 転ずるに当たりて 復た遲疑す

（梁・江洪「詠舞女詩」）

- 111 上車畏不妍 車に上りて 妍ならざるを畏れ
顧盼更斜轉 顧盼して 更に斜めに転ず

（梁・江洪「詠美人治粧」）

- 113 圓瑤耳上照 瑤瑤 耳上に照り
方繡領間斜 方繡 領間に斜めなり

（梁・費昶「華光省中夜聞城外擣衣詩」）

- 121 湑匱金鈿滿 湑匱^{かふせふ}として 金鈿滿ち
參差繡領斜 參差^{しんし}として 繡領斜めなり

（梁・王樞「徐尚書座賦得阿憐詩」）

123 可憐女子能照影 可憐なる女子 能く影を照らし
不見其餘見斜領 其の余を見ずして 斜領を見る

(梁・横吹曲辞「捉搦歌」四曲 其三)

7・50・79・84・121は、斜めに挿した簪、70は、斜めに垂れた鬢の毛で、「嬖童」は若い少年のことだが、女性以上に色っぽさがある。95の詩に、「比來 粧点異なり、今世 撥鬢斜めなり」とあるように、髪飾りを斜めに挿したり、顔に色をつけて装飾を施したりすることが流行していたようである。

簪を斜めに挿すだけではなく、63・113・123のように、襟を斜めに傾けるのも流行ったようで、28は、襟に描かれた合歡の木の模様である。

美しい女性が流し目をし、身体をくねらせる様を描いたものもある。93・109は流し目を、41・111は身体をくねらせた女性の色っぽさを描いている。35は、斜めに傾けた扇を描いている。

「斜めに挿した簪を 秋の水面に映じて直し、鏡を開いて 春の装いをあれこれと見る。」(7)「袴をたくし上げれば 薄紅色の下着が現れ、首を回せば 鬢の毛が斜めに垂れる。」(70)「さりげなく 紅の肩衣を羽織り、斜めに寄り掛かって 玉の簪を挿している。」(84) など、いずれも大変に美しい。

「斜柯」の用例は、最初に紹介した漢代の「艶歌行」以来であるが、うさん臭い目つきでにらむ宿屋の亭主と、宮中の美女とでは、あまりに違いがある。「ひとみを斜めに見やっても 流し目したようではなく、体をひねるとき ちょっとためらう。」(109)「車に乗るとき 美しくないかと気がかりで、鏡に向かって左右を見 また斜めに身をひねる。」(111)「丸い飾り玉は 耳に輝き、刺繍のえりもとが 斜めに立っている。」(113)

好みの問題は別として、これほどまでに女性の美しさを繊細に描ききっていることは、それなりに評価すべきだと思う。

八 ま と め

(一) シンメトリカルな美しさ

さて以上、梁代の詩歌に描かれた「斜」の用例を見てきた。なぜ「斜」なのかといえば、図形的・幾何学的な美しさを表現できることにあり、私は考えている。以下、「斜」をシンメトリカルに描いた用例を幾つか挙げてみよう。

10 曲池浮采采 曲池に浮かびて 采采たり
(110) 斜岸列依依 斜岸に列して 依依たり

(梁・柳惲「詠薔薇詩」)

(梁・江洪「詠薔薇詩」)

- 53 岸曲斜梁阻 岸曲 斜梁阻む
何時香歩歸 何れの時にか 香歩帰らん

（梁・徐擒「壞橋詩」）

- 106 斜峰繞徑曲 斜峰 徑曲を繞り
聳石帶山連 聳石 山を帯びて連なる

（梁・元帝蕭繹「後園作廻文詩」）

- 8 傾壁忽斜豎 傾壁 忽ち斜豎^{しゃしゆ}
絶頂復孤圓 絶頂も復た孤円

（梁・沈約「早發定山詩」）

- 33 翠枝結斜影 翠枝 斜影を結び
綠水散圓文 綠水 円文を散ず

（梁・王僧孺「春日寄郷友詩」）

- 75 浮雲出東嶺 浮雲 東嶺より出で
落日下西江 落日 西江に下る
促陰横隱壁 陰を促して 横さまに壁に隠れ
長暉斜度窗 長暉 斜めに窓を^{わた}度る
亂霞圓綠水 乱霞 綠水に円かに
紅葉影飛缸 紅葉 飛缸に影さす

（梁・簡文帝蕭綱「秋晚詩」）

- 92 雨點散圓文 雨点じて 円文を散じ
風生起斜浪 風生じて 斜浪起こる

（王筠「北寺寅上人房望遠岫翫前池詩」）

- 113 圓瑤耳上照 円瑤 耳上に照り
方繡領間斜 方繡 領間に斜めなり

（梁・費昶「華光省中夜聞城外擣衣詩」）

- 116 月斜樹倒影 月斜めにして 樹 影を倒にし^{さかさま}
風至水迴文 風至りて 水 文を廻らす

（梁・庾丹「秋閨有望詩」）

この他にも、引用は省いたが、「斜」と「直」を対応させた73・91の例、「斜」と「直」を対応させた26の例、「斜」と「横」を対応させた49・55・75などがある。

引用したのは、「斜」と「曲」を対応させた10・53・106と、「斜」と「圓(円)」を対応させた8・33・75・92・113・116の詩歌である。細かな説明は省くけれども、いずれも図形的・幾何学的な美しさを十分表現している。

梁代の詩歌に「斜」という文字の用例数が急増した背景には、当時の詩人たちの美意識に大きな変化があったからだ、私は考えている。

梁の文壇の中心にいた簡文帝蕭綱に、次のような有名な発言がある。

立身之道、與文章異。立身先須謹重、文章且須放蕩。

立身の道は、文章と異なれり。立身は先づ須く謹重なるべく、文章は且つ須く放蕩なるべし。

(「誠当陽公大心書」)

「斜」のように、これまで否定的な意味合いのあった語彙を美しい詩語として文学の世界に導いたこと、また、従来注目されなかった素材(たとえば蝶、蛭、梅、苔、橋など)を積極的に詠じたことなど、梁の詩人たちの功績は極めて大きく、改めて再評価すべきである。と同時に、梁の詩人たちに多大な影響を与えた晋宋の民間歌謡の存在にも着目すべきであろう。

(二) 山水詩・詠物詩・宮体詩

最後に触れておきたいのは、この時代に流行した山水詩や詠物詩・宮体詩に関する問題である。

小尾郊一氏・林田慎之助氏らは、山水詩から詠物詩へ、詠物詩から宮体詩へと、その文学史的な流れを次のように説明している。

○山水詩が普及するにしたがって、王侯貴族の自然美の観賞が幽邃な山水の境地から、齊梁間に盛んに造られた広大な庭園内の山水の風致に及び、その対象は著しく日常性を帯び、かくて範圍が自己の周辺の自然美の発見に狭められてくると、いきおい細密な描写への志向が全体的な情緒の構成に主眼をおく山水詩では満足できなくなり、自己の周辺に新しい素材、草木・鳥獸・器物を対象にする詠物詩の発生を促すことになる。

(小尾郊一『中国文学に現れた自然観』の「詠物詩」の条)

○本来器物を対象にしていたのが、美人にまでその対象を拡大していった詠物詩の流れにたてば、詠物詩のなかの一素材として、うたわれていた詠美人の詩から、主に美人の姿態描写のみを詠じる気風が派生し、簡文帝皇太子時代の東宮において、徐擒などの手で助長され、遂にそれが

他の詠物詩を抑え、新体として独立していったと考えられる。

（林田慎之助『中国中世文学評論史』の「南朝文学放蕩論の美意識」の条）

この両氏の説を結び合わせると、山水詩→詠物詩→宮体詩という文学史の大きな流れが出来上がる。しかしながら、そんなに単純に図式化してよいのであろうか。

今回、「斜」という語をキーワードにして、幾つかの分析を試みた結果、「斜」の美しさを発見したのは、簡文帝蕭綱らを中心とする梁の文壇の詩人たちであったこと、そして、「斜」という語が意味をもちはじめたのは、東晋・宋代の民間歌謡（相和歌辞）にあったことが明らかになった。相和歌辞こそ、実は齊梁時代の宮体詩の源流であり、時系列的に見れば、それは（謝靈運を代表とする）山水詩や、その前の（孫綽を代表とする）玄言詩や（陶淵明を代表とする）田園詩が行われた時代とほぼ同時期である。

齊梁の宮体詩は、修辭主義に偏したために長く批判され続け、晋宋の民間歌謡も、その通俗性のために、従来の評価は必ずしも高くない。しかしながら、詩人たちの文学創作に費やした驚くほどの熱意と、その結果産まれた夥しい「詩語」の数々は、正当に評価すべきである。この点について、更に別の角度から明らかにしてゆきたい。

註

①全漢詩索引（權歌書房・昭和59年10月）

全三国詩索引（權歌書房・昭和60年9月）

全晋詩索引上・下（權歌書房・昭和62年3月）

全宋詩索引（福岡大学中国文学会・平成4年1月）

齊詩索引（福岡大学中国文学会・平成元年1月）

梁詩索引（未刊）

北魏詩索引（權歌書房・昭和61年10月）

北齊詩索引（權歌書房・昭和62年7月）

北周詩索引（福岡大学中国文学会・平成2年3月）

陳詩索引（福岡大学中国文学会・平成5年3月）

隋詩索引（福岡大学中国文学会・平成6年12月）

②漢魏晋南北朝詩「詩語」集成は、平成11年度から14年度までの、文部科学省研究補助金（基盤研究C）の補助を得てなされたものである。

③遼欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』（1983・北京中華書局）中の『梁詩』に収められ詩歌で、「斜」を用いた124の用例を次に示す。

卷3

- 1 蕭條晚秋景、旻雲承景斜。(江淹「秋夕納涼奉和刑獄舅詩」) 3-1565
- 2 我有幽蘭念、銜意囑里斜。(江淹「當春四韻同□左丞詩」) 3-1567

卷5

- 3 傾光望轉蕙、斜日照西垣。(任昉「苦熱行」) 5-1600
- 4 羅裙有長短、翠鬟無低斜。(丘遲「答徐侍中為人贈婦詩」) 5-1603
- 5 落暉散長足、細雨織斜文。(虞騫「擬雨詩」) 5-1611

卷6

- 6 寄言狹斜子、詎知隴道難。(沈約「白馬篇」) 6-1619
- 7 斜簪映秋水、開鏡比春妝。(沈約「携手曲」) 6-1622
- 8 傾壁忽斜豎、絕頂復孤圓。(沈約「早發定山詩」) 6-1636

卷7

- 9 影逐斜月來、香隨遠風入。(沈約「為鄰人有懷不至詩」) 7-1659

卷8

- 10 曲池浮采采、斜岸列依依。(柳惲「詠薔薇詩」) 8-1676
- 11 日斜迢遞宇、風起嵯峨雲。(何遜「九日侍宴樂游苑詩為西封侯作」) 8-1681
- 12 遠天去浮雲、長壚斜落景。(何遜「望廡前水竹答崔錄事詩」) 8-1682
- 13 悽愴戶涼入、徘徊欄影斜。(何遜「秋夕仰贈從兄賓南」) 8-1686
- 14 曲陌背通垣、長壚抵狹斜。(何遜「南還道中送贈劉諮議別詩」) 8-1687
- 15 寓目皆鄉思、何時見狹斜。(何遜「渡連圻詩」二首 其二) 8-1690
- 16 曉河沒高棟、斜月半空庭。(何遜「和蕭諮議岑離閨怨詩」) 8-1692
- 17 直荷□□水、斜柳細牽風。(何遜「傷徐主簿」) 8-1695

卷9

- 18 浦口望斜月、洲外聞長風。(何遜「夜夢故人詩」) 9-1697
- 19 欄外鶯啼罷、園裏日光斜。(何遜「贈王左丞詩」) 9-1702
- 20 暮煙起遙岸、斜日照安流。(何遜「見征人分別詩」) 9-1704
- 21 閨閣行人斷、房櫳月影斜。(何遜「閨怨詩」二首 其二) 9-1709
- 22 遠鼓依林響、連檣倚岸斜。(朱記室「送別不及贈何殷二記室詩」) 9-1716

卷10

- 23 斜看水外翟、側聽嶺南鸞。(吳均「雉朝飛操」) 10-1721

卷11

- 24·25 聊持駐景斜、景斜不可駐。(吳均「采藥大布山詩」) 11-1739
- 26 直趣珠星北、斜開碧海東。(吳均「憶費昶詩」) 11-1742
- 27 公卿來悵別、葭聲在狹斜。(吳均「征客詩」) 11-1751
- 28 錦腰連枝滴、繡領合歡斜。(吳均「雜絕句詩」四首 其三) 11-1751

卷12

- 29 前望蒼龍門、斜瞻白鶴館。（劉峻「自江州還入石頭詩」） 12-1757
- 30 回風稍驚水、落光漸斜岸。（王僧孺「侍宴詩」） 12-1762
- 31 空籠望懸石、回斜見危島。（王僧孺「至牛渚憶魏少英詩」） 12-1763
- 32 浪逐東歸水、心挂西斜月。（王僧孺「忽不任愁聊示固遠詩」） 12-1764
- 33 翠枝結斜影、綠水散圓文。（王僧孺「春日寄鄉友詩」） 12-1766
- 34 斜光隱西壁、暮雀上南枝。（王僧孺「秋閨怨詩」） 12-1767
- 35 轉盼非無以、斜扇還相矚。（王僧孺「在王晋安酒席数韻詩」） 12-1768
- 36 岸煙起暮色、岸水帶斜暉。（王僧孺「詠春詩」） 12-1770

卷13

- 37 遠度時依幕、斜來如畏窗。（紀少瑜「月中飛蛩詩」） 13-1779
- 38 映日斜生海、跨樹似鵬飛。（張率「玄雲」） 13-1783

卷14

- 39 從雲合且散、因風卷復斜。（裴子野「詠雪詩」） 14-1790
- 40 澗斜日欲隱、煙生樓半藏。（昭明太子蕭統「開善寺法会詩」） 14-1796

卷15

- 41 斜身含遠意、頓足有餘情。（殷芸「詠舞詩」） 15-1803
- 42 春晚駕香車、交輪礙狹斜。（劉遵「相逢狹路間」） 15-1809
- 43 荷陰斜合翠、蓮影對分紅。（徐勉「夏詩」） 15-1813
- 44 雨罷葉增綠、日斜樹影長。（蕭子顯「侍宴餞陸倕令」） 15-1819

卷17

- 45 長絲觸欄斷、歸鳥避窗斜。（劉綬「和晚日登樓詩」） 17-1848
- 46 送君追遐路、路斜暖朝霧。（劉孺「相逢狹路間」） 17-1851

卷18

- 47 丹庭斜草徑、素壁點苔錢。（劉孝威「怨詩」） 18-1867
- 48 翩翩驄馬驅、橫行復斜趨。（劉孝威「驄馬驅」） 18-1872
- 49 荒徑橫臨浦、空舟斜插橈。（劉孝威「奉和六月壬午應令詩」） 18-1876
- 50 紅衫向後結、金簪臨鬢斜。（劉孝威「都縣遇人見織率爾寄婦詩」） 18-1878
- 51 開關簾影出、參差風焰焰斜。（劉孝威「和簾裏燭詩」） 18-1884
- 52 極望傷春日、廻車歸狹斜。（劉孝威「登覆敷舟山望湖北詩」） 18-1877

卷19

- 53 岸曲斜梁阻、何時香步歸。（徐擒「壞橋詩」） 19-1892
- 54 簾月度斜輝、風光起餘馥。（蕭子範「夏夜獨坐詩」） 19-1897
- 55 光景斜漢宮、橫梁照采虹。（蕭子範「春望古意詩」） 19-1897
- 56 入帳華珠被、斜筵照寶瑟。（蕭子範「望秋月詩」） 19-1897

卷20

- 57 銅梁指斜谷、劍道望中區。(簡文帝蕭綱「蜀国絃歌篇十韻」) 20-1902
- 58 分妝間淺鬢、繞臉傅斜紅。(簡文帝蕭綱「艷歌篇十八韻」) 20-1902
- 59 南遊偃師縣、斜上灞陵東。(簡文帝蕭綱「京洛篇」) 20-1907
- 60 雲斜花影沒、日落荷心香。(簡文帝蕭綱「苦熱行」) 20-1908
- 61 茱萸生狹斜、結子復銜花。(簡文帝蕭綱「茱萸女」) 20-1909
- 62 雜與鬢簪插、偶逐鬢鈿斜。(簡文帝蕭綱「茱萸女」) 20-1909
- 63 牀頭辟繩結、鏡上領巾斜。(簡文帝蕭綱「金樂歌」) 20-1909
- 64 斜窗通蕋氣、細隙引塵光。(簡文帝蕭綱「艷歌曲」) 20-1913
- 65 避鷹時聳角、妬嬈或斜飛。(簡文帝蕭綱「雉朝飛操」) 20-1915
- 66 北窗聊就枕、南簷日未斜。(簡文帝蕭綱「詠內人昼眠詩」) 20-1941

卷21

- 67 窗斜八綺、燈懸百枝。(簡文帝蕭綱「応令詩」) 21-1930
- 68 細松斜遶逕、峻嶺半藏天。(簡文帝蕭綱「往虎窟山寺詩」) 21-1934
- 69 晝花斜色去、夜樹有輕陰。(簡文帝蕭綱「十空詩」六首 其五「如影」) 21-1938
- 70 攬袴輕紅出、回頭雙鬢斜。(簡文帝蕭綱「嬰童詩」) 21-1941
- 71 斜燈入錦帳、微煙出玉牀。(簡文帝蕭綱「倡婦怨情詩」十二韻) 21-1941
- 72 香煙出窗裏、落日斜階上。(簡文帝蕭綱「戲作謝惠連体十三韻詩」) 21-1942
- 73 日正山無影、城斜漢屢迴。(簡文帝蕭綱「漢高廟賽神詩」) 21-1943
- 74 斜日晚駸駸、池塘生半陰。(簡文帝蕭綱「納涼詩」) 21-1946
- 75 促陰橫隱壁、長暉斜度窗。(簡文帝蕭綱「秋晚詩」) 21-1947
- 76 影斜鞭照曜、塵起足蹉跎。(簡文帝蕭綱「西齊行馬詩」) 21-1949

卷22

- 77 一水斜開岸、雙城遙共雲。(簡文帝蕭綱「登城北望詩」) 22-1951
- 78 杏梁斜日照、餘輝映美人。(簡文帝蕭綱「擬落日窓中坐詩」) 22-1954
- 79 北窗向朝鏡、錦帳復斜榮。(簡文帝蕭綱「美人晨粧詩」) 22-1953
- 80 遠燭承歌黛、斜橋聞履聲。(簡文帝蕭綱「九日賦韻詩」) 22-1958
- 81 斜闌隱濁霧、布影入清澗。(簡文帝蕭綱「賦得橋詩」) 22-1958
- 82 儻令斜日照、併欲似遊絲。(簡文帝蕭綱「賦得入塔雨詩」) 22-1965
- 83 風還影合離、日光斜隱見。(簡文帝蕭綱「詠梔子花詩」) 22-1966
- 84 散誕垂紅帔、斜柯插玉簪。(簡文帝蕭綱「遙望詩」) 22-1970
- 85 織條寄喬木、弱影掣風斜。(簡文帝蕭綱「詠藤詩」) 22-1973
- 86 斜梁懸水跡、畫柱脫輕朱。(簡文帝蕭綱「詠壞橋詩」) 22-1975
- 87 朝日斜來照戶、春鳥爭飛出林。(簡文帝蕭綱「倡樓怨節詩」) 22-1977
- 88 落日斜飛蓋、餘暉承畫輪。(簡文帝蕭綱「傷離新体詩」) 22-1979

- 89 岸燭斜臨水、波光上映樓。（簡文帝蕭綱「曲水聯句詩」）22-1980

卷23

- 90 去影背斜日、香衣臨上風。（庾肩吾「送別於建興苑相逢詩」）23-1993
91 足欹形已正、文斜體自平。（庾肩吾「詠胡牀應教詩」）23-1999

卷24

- 92 雨點散圓文、風生起斜浪。（王筠「北寺寅上人房望遠岫翫前池詩」）24-2013
93 含嬌起斜盼、歛笑動微嚬。（王筠「五日望採拾詩」）24-2017
94 雕甍斜落景、畫扇拂遊塵。（鮑泉「落日看還詩」）24-2026
95 比來粧點異、今世撥鬢斜。（劭陵王蕭綸「見姬人詩」）24-2029

卷25

- 96 松澗流星影、桂窗斜月暉。（元帝蕭繹「船名詩」）25-2042
97 東方曉星沒、西山晚日斜。（元帝蕭繹「歌曲名詩」）25-2043
98 裂紈依岸草、斜桂逐行船。（元帝蕭繹「望江中月影詩」）25-2045
99 高春斜日下、佳氣滿欄楹。（元帝蕭繹「納涼詩」）25-2046
100 橫枝斜綰袖、嫩葉下牽裾。（元帝蕭繹「看摘薔薇詩」）25-2047
101 路遠聲難徹、飛斜行未齊。（元帝蕭繹「詠晚棲烏詩」）25-2048
102 經過狹斜裏、旦暮且淹留。（元帝蕭繹「長安路詩」）25-2048
103 前望青龍門、斜暉白鶴館。（元帝蕭繹「自江州還入石頭詩」）25-2049
104 日斜下北閣、高宴出南榮。（元帝蕭繹「和林下作妓應令詩」）25-2051
105 暮春多淑氣、斜景落高春。（元帝蕭繹「遊後園詩」）25-2053
106 斜峰繞徑曲、聳石帶山連。（元帝蕭繹「後園作迴文詩」）25-2058

卷26

- 107 樹斜牽錦帔、風橫入紅綸。（徐君蒨「初春携内人行戲詩」）26-2067
108 荷陰斜合翠、蓮影對分紅。（徐朏「夏詩」）26-2069
109 斜晴若不昞、當轉復遲疑。（江洪「詠舞女詩」）26-2074
110 曲池浮采采、斜岸列依依。（江洪「詠薔薇詩」）26-2075
111 上車畏不妍、顧盼更斜轉。（江洪「詠美人治粧」）26-2075

卷27

- 112 日斜天欲暮、風生浪未息。（費昶「採菱詩」）27-2082
113 圓瑤耳上照、方繡領間斜。（費昶「華光省中夜聞城外擣衣詩」）27-2085
114 瑤臺斜接岫、玉殿上凌空。（王臺卿「和簡文帝賽漢高祖廟詩」）27-2088
115 弓寒折錦韃、馬凍滑斜蹄。（戴嵩「從軍行」）27-2098
116 月斜樹倒影、風至水迴文。（庾丹「秋閨有望詩」）27-2101
117 樹陰綠砌上、窗影向牀斜。（鄧鏗「月夜閨中詩」）27-2104

卷28

- 118 緑葵向光轉、翠柳逐風斜。(聞人情「春日詩」) 28-2109
 119 衣香隨岸遠、荷影向流斜。(沈君攸「採蓮曲」) 28-2109
 120 柳谷向夕沈餘日、蕙樓臨砌徒斜光。(沈君攸「薄暮動弦歌」) 28-2110
 121 湓匣金鈿滿、參差繡領斜。(王枢「徐尚書座賦得阿憐詩」) 28-2119
 122 花庭麗影斜、蘭牖輕風度。(劉令嫺「答外詩」二首 其一) 28-2131

卷29

- 123 可憐女子能照影、不見其餘見斜領。(橫吹曲辭「捉搦歌」四曲 其三) 29-2158

卷30

- 124 鴻來雀化、參見火斜。(郊廟歌辭「歌白帝辭」) 30-2167
 ④梁代になって急増した文学的素材の例を、5つ挙げておく。

	漢	三国	晋	宋	齊	梁	陳	北魏	北齊	北周	隋	総数
蝶	1	・	1	・	2	36	4	2	1	2	・	49
螢	・	・	・	1	2	24	6	・	・	5	・	38
梅	1	・	6	12	1	45	26	・	1	8	14	114
苔	・	・	3	10	2	42	15	1	1	2	3	79
橋	・	3	6	4	・	35	27	2	2	35	15	129

(付記)

本稿は、平成14年度文部科学省研究補助金（基盤研究C、題目「漢魏晋南北朝詩『詩語』集成」）による研究成果の一部である。

また、本稿は、平成12年9月に開かれた六朝学会研究例会（青山学院大学）で発表した原稿に、加筆訂正したものである。